

「くせものがたり」贅注 (4)

三 沢 醇 治 郎

【第二十四段】(深草の里に隠れ棲む人)

○昔、深草の里に、世を倦んじてや住家もとめて隠れたる人ありけり。暫し宿れると思ふも、はや四とせ五とせばかりになりぬ。流石に都なつかしき折々は、そなたの空をのみ眺めてありけり。いとまがちなる窓のもとには、枕のみ友として、うち眠れる夢のうちには、庭の梢に遊ぶ小鳥どもの囀つるなかに、駒鳥の舌はやなるが、人のもの言ふにかはらで、独り言するは、「春毎にこの庵に来て遊ぶに、この主じは何をわたらひにするともなきいたづら人なり。かくても世にすむかひありや、いと悪むべきものなり」といふ。下枝に遊ぶう、そ姫これを聞きて、「生れつきて心せばく、世をわたらむとすれば、おひかりの恐ろしく、人は心の寛きままに、あしきといふ事も偽りも世の害にだにならぬ事はにくまずしてなすまますなを、それらを見聞きたび毎にうちも歎き或は怒りなどもしつづ、また書読めば昔のみのしづばしく、今世をうとみ、芸に遊べば古き世の人は上手も下手も心たかしく仰ぎ、今の眼のつけ所をさげしみて楽しまぬにより、年月を徒らに暮らすなり。世に憐れむべき者なり」と答ふ。駒王ききて、からからと

笑ひ、「さればこそ世の驕りものか、浅ましの心なれ」といふ。う、そ姫はいく、「主じは常によき衣を身にまとふ事なく、あまきを食らはず、紙の衾・紙の張に事足りて、何事にもつづまやかを守りげにて奢れるを見ず」と、駒王はいく、「わが奢れるといふは、さる理にあらず。主じは世にいふ痼癖の病を瘳らして、え養はぬ愚かさより、われを尊しとは思ひあがらねど、世の人はみな濁れるものにする心奢りの人なり。この主じが思ふにかなふ世も人も古よりあることなし。唐のやまとの書どもに倦かず教ふるも、世の人の直からず大方はねぢけのみ行くを教きてにあらずや。この理を推しただきても、その教のままに行ふ人はあらぬげなり。主じもこれが類なるべし。よしや、なすもなきぬも、われ賢(さか)し愚かのみにはあらで、賢(さか)き人も世に推し立てられては行へど、猶かひなきものか。筆をとりては文武周公をもそしる人古より少なからず。今の世にも癡癡をさへ悪しくとりなして云ふ人もあり。さて、それらが悟れる顔に書きあらはす其愚の乾かぬ間も、我は及ばぬことを知りつづ云ひ出づるが、われ賢この仕業なりけり。世に推し立てられても、おのれ濁らぬは先づ善しいへ

り。それも、うはべを濁らざれば世には交はり難し。この主じが輩は、これ行ふこと能はぬものなり。濁るといへば悪むべきを、ただ世の有様と見ば事々しく忌むべきにもあらず。花見・嫁入の晴の衣は、いつしか壬生(みぶ)のしやてんの踊り小袖となり、俳諧師の頭に鳥帽子がとまれば、神の忌垣の七五三繩は、関取の禪(ふんどし)にまとも。はした宝の山に入りて時々市に菓を商ふ歌舞妓仙人もあれば、

(中略)遊女の間はせ文に虞世南の書風あり、大名仕立ての町人あれば、阿闍陀おさへの機関(からくり)士あり。蛮学・天文・投壺・盆石・琵琶・明楽、世に廃れたる遊びも、拾ふ神の守りはありけるものを、それこれの違いを云はで、世に推し移りつつ見聞かむには、怒りも怨みもあるまじき事ならずや。それを違へる者にうち歎くは、われ賢この心奢りなり。淡きをくらひ薄きを著るとも、与へば重ねむ、おくらば食らはむ。驕らずといふにはあらで貧しきがなす身の行ひぞ」とて駒王のからからと笑へば百千(ももち)とりどりに笑ふ。うそ、姪もききと笑へば、山も笑ひ野も笑ふ。春の眠さまし、「かんべき談」とも「くせものがたり」とも、何ともかとも、あら現な世がたりや。

○(原注)うそ姪物語といふ草紙あるによる名なり。

○(原注)莊子に「尊古卑今、学者之流也」。

○(原注)駒王とはうそ姪に対する戲言のみ。王とは鳥毛の王といふにあらず、唐の駱賓王また松王・梅王におなじ。

○(原注)世人皆濁れりとは漁父の辞なり。すべて此段はかの辞を摘みて莊子に合せ塩梅したる物と見ゆ。

○(原注)孔夫子さへ世におし立てられて行ふこと難きなり。

○(原注)今神道者といふもの堯舜をそしめるあり。

○(原注)漢の卓茂といふ人、我は行二其清濁之間一と云へり。

(補説参看)

○(原注)柳下惠といふ人は世とよく推し移れりといふ話あり。
(補説参看)

[注]①おひかり借金・負債。

②「にくまずして」刊本に「たくまずして」、今、写本による。

③芸に遊ぶ論語、述而篇に見える語。

④駒王貞丈雜記、卷二に「金王・箱王・菊王・駒王などの王の字は、經基王・高見王などの心にて王の字つけたるなるべし。王孫ならずして王の字はつくまじき事なれども乱世には禁裏よりも御とがめなく捨て置かれしなるべし」云云。

⑤癩癖の病病的に怒り易い癖。癩瘡もちともいう。

⑥え養はぬ愚かさ自己の意志で病を静めかねている愚かさ。一体癩癖といふのは病氣というよりも寧ろ意志の弱さから来る性癖として扱われたから、癩癖家を一種の意氣地なしと見たのである。

⑦其理をおしただきてもその道理はよく理解し敬服しても。

⑧堯舜をさへ悪しく之をそしめる人は原注にある通り、多く神道者で、例えば垂加神道の山崎闇齋の如き。(なお補説を見よ。)

⑨おのれ濁らぬは先づよし世の中の汚濁を正すのは第二として、自分がその汚濁に染まねば、先ず立派なものである。

⑩壬生のしやてん京都四条大宮の壬生寺で毎春行われる無言劇を壬生狂言という。「しやてん」は小林歌城(うたき)の注に「シヤテンシヤテンは壬生狂言の鉦の声を云ふ」とあり。(補説あ

り。)

⑪俳諧師の頭に烏帽子 当時神官にして俳人だった人を指したのであろう。(室町季世の荒木田守武の如き)

⑫はした宝の山に入りて 霊山に住む仙人が時々市井に現われて仙薬を売るといふ中国の伝説を地にした洒落で、僅かな木戸銭で観た芝居を、仰山そうに友人間に吹聴する自称芝居通。はした宝は端た金、宝の山は劇場を指し、市に菓を商うは床屋や風呂屋で自慢そうに吹き散らすこと。歌舞妓仙人は上方における芝居通の異名なる由歌城の注に見える。(補説あり。)

⑬阿蘭陀おさへのからくり士 機関士は微妙な機械仕かけを考案する人。当時舶来の奇妙なからくりで驚かされた時、舶来そのものの不思議な機械仕掛けを考案した日本人もある世の中。(補説を見よ)

⑭投壺 矢をとって壺の中に投げ入れる勝負事。古く中国で行われ、礼記の中に投壺の条がある。一名「つぼうち」又「つぼなげ」ともいふ。(補説あり。)

⑮盆石 色さまざまな砂や、山の形をした石などを集めて盆の上に山水の風景を写し作る遊び。盆絵とも盆景ともいふ。天明頃に流行した。⑯明楽(みんがく) 中国明朝の音楽。笙・ひちりき・琵琶・大鼓などを用いる。明の滅亡後、寛永ごろ日本に伝わり、明和頃京阪地方に大に行われた。(補説あり。)⑰くせものがたり 世の中の一風変わった人々(くせ者)の描写という意を伊勢物語の語呂に合わせたもの。(詳しくは甲南女子短大論叢、第一号、拙稿「くせものがたりの初稿本」を参照せられたし。)

〔補説〕①概評——深草の里に世を倦んじて隠れ住むのは外ならぬ作者秋成である。世を白眼視して孤往する自己を、暫く第三者の立場から眺めた自己批評、或は自己嘲笑の文である。駒鳥とうそ、姉どの口吻を仮りて物語めかした書出しから、世に癩癖の病を募らしてえ養わぬ心驕りの人間を皮肉に罵ったこの文は、作者自身にしても恐らくカラカラと声を放つ高笑いの底に、胸をしぼってにじみ出る深刻な涙を否定することができなかつたろう。

本書の序段にもある通り、癩癖はいわゆる気まま病で、おのれの理想と合致せぬ社会の諸相に我慢のならぬ一種の性癖である。自ら進んでこれを改善しようという意気もなく、責任をも感ぜず、ただ世相の転々として俗悪にうつって行くのを、あきらめ切れずに業を煮やす。従って、自分は自然に社会とかけ離れて、敬遠され、冷遇を受け、益々煩悶の末は自らそこなうに至るのが常である。宿命を知り、変転の理をあきらめ、大乘の妙趣にめざめ、在るがままなる世相を観するまでには、まだまだ数十歩の差のある連中なのである。

然しながら、このような癩癖家は即ち神経の鋭敏な稟質の持主であるから、一方で当世の現状に不平不満を叫びつつづけると共に、一步退いて、この矛盾きわまる自己の姿をも冷やかに観照して、自身に対しても冷酷な罵倒を投げつけるものである。この段は即ちそれで、本書序段以来放散し来たった悪罵録の最後に、青筋張ったおのれの癩癪づらをひっさげ来って一篇の結びとするが如きは、蓋し皮肉無上の極点ともいふべきであらう。

②擬人法——この段のように擬人法を用いて自己批評を試みたものに

別に「曉時雨」(秋成遺文に収む)の一文がある。神無月のある曉、戸の外に鶯の声が聞えて、蛙形の庭の置石と物語りする体である。ここにも庵の主じに対する手痛い嘲罵が見られる。

③ 堯舜——「今の世には堯舜をさへ悪くとりなして云ふ人あり」云々については、原注にある通り当時の神道者を指して云ったのであるが、一体江戸時代には自己反省の機運につれて神道の研究も盛に行われ、従って国体觀念にも目ざめて来たので、神道家、国学者のうちには尊内卑外の思想から大に儒仏を排する者が出て来て、儒道の聖人たる堯舜禹湯文武周公をも悪しくいうようになった。注に挙げた山崎闇斎の如きは垂加神道の立場から「湯武革命論」を草して湯武の放伐を非難しているし、賀茂真淵もまた「国意考」で儒教に攻撃の矢を向けて居り、本居宣長は「直毘靈」(なおびのみたま)「くす花」(けんきょうじん)等で漢土の聖人を思い切りこきおろしている。

「或る人、舜は堯が国を奪ひ、禹も亦舜が国を奪へりしなりといへるも、さも有るべきことぞ。後の世の王莽・曹操が類も表面は譲りを受けて嗣ぎつれども実はうばへるを以て思へば、舜禹などもさぞありけむを上つ代はすなほにして、禪(ゆづ)れりといひなせるをまことと心得て国内の人ども皆あざむかれにけらし」(明和八年刊、直毘靈)

これに対しては秋成が「安安言」(やすみごと)の中で盛に反駁を加えている。

④ 壬生狂言——壬生寺発行の「壬生狂言のしをり」によれば、「後伏見天皇の正安年中、円覚上人当寺に住し衆生済度のために

融通念仏を創始したが幾千万人に物言ふことの届かぬを憂へ賢くもかなでんの音律を定め身振り物真似の黙劇を巧案し、以て度生の誓願を成就し畏くも後宇多天皇の叡感を忝うし特に円覚上人の号を賜はった」

とあるが、吉沢博士の「壬生狂言源流考」によれば、その源は田楽の猿芸に在り、恐らく江戸時代に入ってから始まったものであるという。現在では毎年四月二十一日から五月十日まで二十日間行われる。狂言には別に脚本がなく、演者は附近の信徒で、装束は寄進の古衣裳を用い現在の囃子は笛と太鼓で、昔から定まった狂言は次の二十四番である。

桶とり、花盗人、紅葉狩、猿、
愛宕詣、狐釣り、ほうろく割り、
頼光山入、盲人川渡、節分、花見、
猿引、閻魔角力、餓鬼責、曾我、
賽河原、棒縛り、性悪坊主、熊坂、
羅生門、湯立、葵の上、男伊達、
棒ふり。

この外に現今行われるものに左の名が見える。

山の端とろろ、花折、大原女、
酒蔵、大黒狩

⑤ しゃやてん——「壬生のしゃやてん」に対して「社殿」の字を宛てている人もあるが、藤井博士旧蔵の一軸に、秋成の自筆で、上部に大きく銅羅を描き、下に

「しゃや天、しゃやてん天、愛宕まいりがしきみの原でむすめ見そめ

た色よいむすめ、をどりふりよやか桶とりが、こし反らさした六十のをちに。七十二三齡併書也」(雑誌「黒潮」昭和二年三月号、又、雑誌「上方」昭和九年九月、上田秋成号に写真あり、七十二三齡は七十五才。)

とあり、小林歌城の注を正しとする。

⑥市に菓を商う仙人——漢書、方術伝に、

「費長房ハ汝南ノ人ナリ。曾テ市椽トナル。市中ニ老翁アリテ葉ヲ売ル。一壺ヲ肆頭ニ懸ケ、市罷ムニ及ベバ即チ跳リテ壺中ニ入ル。市人ノコレヲ見ル者ナシ。タダ長房ノミ樓上ヨリコレヲ見テ怪シム。因リテ往キテ再拜ス。翁乃チトモニ壺中ニ入レバタダ玉堂ノ蔽麗ナルヲ見ルノミ。旨酒甘肴ソノ中ニ盈行セリ。共ニ飲ミオハリテ出ヅ」(原漢文)

⑦カラクリ——は安永天明の頃に京阪地方の見世物として大に行われ、天明二年の夏大阪難波新地で機織(はたおり)人形・カラクリなどの見世物があったことが記録に残っている。なお、カラクリの一種と見られたエレキテル(電気仕掛け)は、大阪の細工人大江宇兵衛が工夫したもので、安永八年七月から難波新地で見世物としたが、そのエレキテルは精巧を極めていたと見えて、折から来朝の阿蘭陀人が一覧の上、懇望して本国へ持ち帰ったと摂陽年鑑に記してある。(朝倉氏見世物研究による。)これなどは差し詰め「オランダおさへのカラクリ士」に当らう。

⑧蛮学について——室町の末から江戸の初めにかけての七八十年間は割合自由に西洋人が来朝した時代で、始めは南蛮人(ポルトガル人・スペイン人)が宣教を目的として来り、次に紅毛人(オランダ人

・イギリス人)が通商を目的として渡来した。当時は西洋の学問即ち蛮学が盛に輸入せられたのであったが、寛永十四年島原の乱後、三代將軍家光は鎖国主義をとって、阿蘭陀人・中国人のうち特別の許可を得た者を除く一切の西洋人の来航を禁じたので、所謂「蛮学」も全く輸入杜絶の状態となつた。然るに約七十年後の正徳年間に新井白石が「采覧異言」「西洋紀聞」等を著したのが口火となり、八代將軍吉宗に至って學術的洋書を解禁し進んで青木昆陽をして蘭学を学ばせるまでになつた。次いで前野良沢と杉田玄白とが「解体新書」を翻訳出版したのが安永三年で、玄白の門人大槻玄沢が「蘭学階梯」を著して蘭学の普及に多大の貢献をしたのは天明八年。これから以後蘭学は一種の流行にまでなつた。右のような事情から蛮学といえは自然に蘭学を指すようになつた。蘭学が復興するにつれてオランダ文字の流行となり、印形に刻んだり、紋所に用いたり、薬の効能書、看板などに掲げる者も少なくなかつた。又、オランダ名を貰い受けて喜ぶ者もあり、手紙にも頻りに蘭語を挿入することが流行した。

とかくレーゲン絶えず候へども先づつてセールゲンントヘート入らせられヒリシテール存じ奉り候、然れば亜美利加願書拝見仰せ付けられセールベタンキ存じ奉り候、則ち返上仕候、インハンド願上げ奉り候。

レーゲン(雨)、セール(甚だ)、ゲソントヘート(健康)、ヒリシテール(賀)、ベタンキ(感謝)、インハンド(入手)。その稚氣に失笑を禁じ得ないが當時に在っては大まじめであつたこと勿論である。

⑨天文学について——元來日本の天文学は漢土から輸入した術を所謂天文博士なるものが秘伝として相伝えたものだが、その主目的は曆を製作するためであった。曆は古く持統天皇の御世には使われて居り、後百八十年ほどの間に元嘉曆・儀鳳曆・大衍曆・五紀曆など度々変り、清和天皇の貞観三年から宣明曆を用いるに至った。この曆は江戸時代の貞享元年まで約八百余年間も襲用せられたので、時候や天象と大差を生ずるに至った。そこで数学家安井算哲の献言により五代將軍は貞享曆を制定したが、年を経る間にこの曆もまた不完全であることを痛感するようになり、曆改正の決心をしたのが八代吉宗であった。一体吉宗が洋書を解禁したり昆陽に蘭学を学ばせたりした目的は、要するに曆改正の必要にせまられ西洋天文学の研究を企てたに外ならなかったという。故に蘭学の盛行と正比例して天文学の研究が盛んになったわけである。

⑩投壺——については明和七年刊の「投壺指南」という書にその方法が詳記せられているが此処には略する。古式の投壺そのものは正倉院にも伝存する。右の書に、

○負けたる人は罰杯、一壺に一盞もあり、一籌に一盞、十算に一盞もあり。

○賢者（勝者）は慶爵、三番勝二献、肴あるべし。

○負けたる人は綽興とて酒を飲まずば謡にても肴とすべし。

とあり、以て大要を知ることができる。安永天明頃京都地方に一時流行したが方法が俗なものと名目が中国の直訳的であるのとで後に流行し来った投扇興にとって代られた。蕪村の句に、「いざさらば投壺まゐらせん菊の花」

⑪明楽——の日本に渡来した事情は、明人魏之琰（福建省の人）が明朝に仕えて頗る朱明の楽に通じた。崇禎年間、明末の乱を避けて安南に渡ったが、明朝の政權の振わないのを見て、飄然として海に航し、楽器を抱いて肥前長崎に來り遂に帰化した。時に寛永六年である。翌年許しを得て上京し、内裏に召されて明楽を奏上し賞を賜わった。これが明楽渡来の最初である。その子孫は代々長崎に住んで居たが、四世の孫富五郎は民部と改名し君山と号して明和年中京都に遊び同好の士に教授した。ここに於いて明楽が大に行われ学ぶ者數百人に及び、その名が遠近に高くなった。近衛公や東本願寺などへも招かれ、又姫路の酒井侯もこれを好んで近臣をして学ばしめた。君山は病んで長崎に帰り安永三年に没した。

⑫原注にある卓茂は後漢の人で、東觀記に「茂、人と為り恬澹、道を樂しみて雅実、華貌をつくらず、行すでに清濁の間に在り、自ら髪を束ね、白首に至るまで人と未だ嘗て争ひ競はず」と見える。

⑬原注にある柳下惠は春秋時代の魯の人で、姓は展、名は禽、又の名は獲、字は季、食邑が柳下であり、没後惠と諡（おくり名）された。彼は魯に仕えて士師（裁判長）となり三たび黜けられたが生園を去らなかつた。人が問うと、「道によりて人に事へむとすれば、いづくに往くとしてか三たび黜けられざらむ。道を枉げて人に事へむとすれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らむ」と答えたという（論語、微子篇）。その他、孟子・孔子家語にも惠のことが見える。